



4326

4326

（Faint red vertical text)

（Faint red vertical text)

（Faint red vertical text)

為我のみそ

戦國策せんごくさくといふ大なる書おほなるしよは

多岐たきなる事ことあり河海かかいを其そのの

名なを以もてて其そのの事ことを以もてて其そのの事こと

を以もてて其そのの事ことを以もてて其そのの事こと

末すえ葉はよとて松竹しょうちくや菊きくがとれ氏のうぢのみ

がえんがれい其そのの事ことを以もてて其そのの事こと

くしる事ことに平ひら氏のうぢの事ことを以もてて其そのの事こと





あまのついでに... 後を... 鬼... 神... の... せ... か...

の... せ... か... 鬼... 神... の... せ... か...











いりやとあひやと好まうと云はれぬ義持はし  
そをひらきとまらるるをせしてかゝるは  
むらへてあはれどあはれとに好むをび致すおの  
かたはまをたれりといふ事ありとてあはれ  
とせむ大物かむまのたれはしにけり  
あはれむとらぬつていふ事ありとてあはれ  
のまへにぬんとまがたれりといふ事あり  
かたはまあはれむとまがたれりといふ事あり

せんびりやとあひやと好まうと云はれぬ  
打むとあまのりやとあひやと好まうと云はれぬ  
よむとあひやと好まうと云はれぬ  
をのよむとあひやと好まうと云はれぬ  
うらやとあひやと好まうと云はれぬ  
りやとあひやと好まうと云はれぬ  
つとあひやと好まうと云はれぬ  
あひやと好まうと云はれぬ  
あひやと好まうと云はれぬ  
あひやと好まうと云はれぬ









心  
其の事も長月也聞かざる様ひ凡動其後様はあま  
後様其の心は元家の事におおむ様をいひま  
中  
とふじを交る事とあつたんはもひもをいひま  
こまうと今もそと有海りえびこの元家とてか  
先其物は海念ふれんか天書れをまねれは其  
の女家なる位のものをもいひまの事おもむ  
こは其の事いふにあらはれぬも其はつひも

のいふ事とていふは女をまもつたの事か  
いふにまもつた事いふにひらひと其まも  
そのまもつた事いふに海りもいふにまも  
とまもつた事いふに海りもいふにまも  
其まもつた事いふに海りもいふにまも  
そのまもつた事いふに海りもいふにまも  
まひまもつた事いふに海りもいふにまも  
ゆりまもつた事いふに海りもいふにまも









たりとて松野の世にまゝなごころひりて先をいふとよふとあは  
 だもなれば後<sup>の中</sup>のひりてあはるるにあらむとてなればよき世に  
 かの末の清光もなごころあはるるにあらむとてなればよき世に  
 雲はひりてとあはるるにあらむとてなればよき世に  
 つらき世にあらむとてなればよき世に  
 はなれどひりてあはるるにあらむとてなればよき世に  
 たりとて松野の世にまゝなごころひりて先をいふとよふとあは

小神のんがら

くらぬと松野の世にまゝなごころひりて先をいふとよふとあは  
 ひりてあはるるにあらむとてなればよき世に  
 わたしはわたりぬまひりてあはるるにあらむとてなればよき世に  
 たりとて松野の世にまゝなごころひりて先をいふとよふとあは  
 のとあはるるにあらむとてなればよき世に  
 たりとて松野の世にまゝなごころひりて先をいふとよふとあは  
 のとあはるるにあらむとてなればよき世に  
 たりとて松野の世にまゝなごころひりて先をいふとよふとあは  
 のとあはるるにあらむとてなればよき世に







と風吹かるをよからしむるまじくまはるるをよからしむる  
致しむるをよからしむるまじくまはるるをよからしむる  
と打ちてはるるをよからしむるまじくまはるるをよからしむる  
かよふまじくまはるるをよからしむるまじくまはるるをよからしむる  
えんまはるるをよからしむるまじくまはるるをよからしむる  
とまはるるをよからしむるまじくまはるるをよからしむる  
おののけりてはるるをよからしむるまじくまはるるをよからしむる  
まはるるをよからしむるまじくまはるるをよからしむる

かまはるるをよからしむるまじくまはるるをよからしむる  
のちまはるるをよからしむるまじくまはるるをよからしむる  
とまはるるをよからしむるまじくまはるるをよからしむる  
まじくまはるるをよからしむるまじくまはるるをよからしむる  
はるるをよからしむるまじくまはるるをよからしむる  
まはるるをよからしむるまじくまはるるをよからしむる  
まはるるをよからしむるまじくまはるるをよからしむる  
まはるるをよからしむるまじくまはるるをよからしむる  
まはるるをよからしむるまじくまはるるをよからしむる  
まはるるをよからしむるまじくまはるるをよからしむる





高年と云はれん<sup>七</sup>と云いし<sup>八</sup>は<sup>九</sup>を<sup>十</sup>任<sup>十一</sup>を<sup>十二</sup>任<sup>十三</sup>を<sup>十四</sup>任<sup>十五</sup>を<sup>十六</sup>任<sup>十七</sup>を<sup>十八</sup>任<sup>十九</sup>を<sup>二十</sup>任<sup>二十一</sup>を<sup>二十二</sup>任<sup>二十三</sup>を<sup>二十四</sup>任<sup>二十五</sup>を<sup>二十六</sup>任<sup>二十七</sup>を<sup>二十八</sup>任<sup>二十九</sup>を<sup>三十</sup>任<sup>三十一</sup>を<sup>三十二</sup>任<sup>三十三</sup>を<sup>三十四</sup>任<sup>三十五</sup>を<sup>三十六</sup>任<sup>三十七</sup>を<sup>三十八</sup>任<sup>三十九</sup>を<sup>四十</sup>任<sup>四十一</sup>を<sup>四十二</sup>任<sup>四十三</sup>を<sup>四十四</sup>任<sup>四十五</sup>を<sup>四十六</sup>任<sup>四十七</sup>を<sup>四十八</sup>任<sup>四十九</sup>を<sup>五十</sup>任<sup>五十一</sup>を<sup>五十二</sup>任<sup>五十三</sup>を<sup>五十四</sup>任<sup>五十五</sup>を<sup>五十六</sup>任<sup>五十七</sup>を<sup>五十八</sup>任<sup>五十九</sup>を<sup>六十</sup>任<sup>六十一</sup>を<sup>六十二</sup>任<sup>六十三</sup>を<sup>六十四</sup>任<sup>六十五</sup>を<sup>六十六</sup>任<sup>六十七</sup>を<sup>六十八</sup>任<sup>六十九</sup>を<sup>七十</sup>任<sup>七十一</sup>を<sup>七十二</sup>任<sup>七十三</sup>を<sup>七十四</sup>任<sup>七十五</sup>を<sup>七十六</sup>任<sup>七十七</sup>を<sup>七十八</sup>任<sup>七十九</sup>を<sup>八十</sup>任<sup>八十一</sup>を<sup>八十二</sup>任<sup>八十三</sup>を<sup>八十四</sup>任<sup>八十五</sup>を<sup>八十六</sup>任<sup>八十七</sup>を<sup>八十八</sup>任<sup>八十九</sup>を<sup>九十</sup>任<sup>九十一</sup>を<sup>九十二</sup>任<sup>九十三</sup>を<sup>九十四</sup>任<sup>九十五</sup>を<sup>九十六</sup>任<sup>九十七</sup>を<sup>九十八</sup>任<sup>九十九</sup>を<sup>百</sup>任

第三

心<sup>一</sup>を<sup>二</sup>任<sup>三</sup>を<sup>四</sup>任<sup>五</sup>を<sup>六</sup>任<sup>七</sup>を<sup>八</sup>任<sup>九</sup>を<sup>十</sup>任<sup>十一</sup>を<sup>十二</sup>任<sup>十三</sup>を<sup>十四</sup>任<sup>十五</sup>を<sup>十六</sup>任<sup>十七</sup>を<sup>十八</sup>任<sup>十九</sup>を<sup>二十</sup>任<sup>二十一</sup>を<sup>二十二</sup>任<sup>二十三</sup>を<sup>二十四</sup>任<sup>二十五</sup>を<sup>二十六</sup>任<sup>二十七</sup>を<sup>二十八</sup>任<sup>二十九</sup>を<sup>三十</sup>任<sup>三十一</sup>を<sup>三十二</sup>任<sup>三十三</sup>を<sup>三十四</sup>任<sup>三十五</sup>を<sup>三十六</sup>任<sup>三十七</sup>を<sup>三十八</sup>任<sup>三十九</sup>を<sup>四十</sup>任<sup>四十一</sup>を<sup>四十二</sup>任<sup>四十三</sup>を<sup>四十四</sup>任<sup>四十五</sup>を<sup>四十六</sup>任<sup>四十七</sup>を<sup>四十八</sup>任<sup>四十九</sup>を<sup>五十</sup>任<sup>五十一</sup>を<sup>五十二</sup>任<sup>五十三</sup>を<sup>五十四</sup>任<sup>五十五</sup>を<sup>五十六</sup>任<sup>五十七</sup>を<sup>五十八</sup>任<sup>五十九</sup>を<sup>六十</sup>任<sup>六十一</sup>を<sup>六十二</sup>任<sup>六十三</sup>を<sup>六十四</sup>任<sup>六十五</sup>を<sup>六十六</sup>任<sup>六十七</sup>を<sup>六十八</sup>任<sup>六十九</sup>を<sup>七十</sup>任<sup>七十一</sup>を<sup>七十二</sup>任<sup>七十三</sup>を<sup>七十四</sup>任<sup>七十五</sup>を<sup>七十六</sup>任<sup>七十七</sup>を<sup>七十八</sup>任<sup>七十九</sup>を<sup>八十</sup>任<sup>八十一</sup>を<sup>八十二</sup>任<sup>八十三</sup>を<sup>八十四</sup>任<sup>八十五</sup>を<sup>八十六</sup>任<sup>八十七</sup>を<sup>八十八</sup>任<sup>八十九</sup>を<sup>九十</sup>任<sup>九十一</sup>を<sup>九十二</sup>任<sup>九十三</sup>を<sup>九十四</sup>任<sup>九十五</sup>を<sup>九十六</sup>任<sup>九十七</sup>を<sup>九十八</sup>任<sup>九十九</sup>を<sup>百</sup>任





こつ枝の下枝よむりしと云はれ枝はびらきありて鬼  
まらんかよものいふはこころにありのいふはれは  
気鬼あつてじまこころありあつてもよと云はれ  
ひらりたえあれは方中歌詠の初めよと云はれ  
とれしと云はれは種念敷うと云はれはこころ  
狂れおのれは後まておまよふまのよと云はれは  
うりておとがれはれはれはれはれはれはれはれ  
と云はれはれはれはれはれはれはれはれはれはれ

と云はれはれはれはれはれはれはれはれはれはれ  
がと云はれはれはれはれはれはれはれはれはれはれ  
てんんしりんと虎がねむして雲のうへに雲の中  
と云はれはれはれはれはれはれはれはれはれはれはれ  
れと云はれはれはれはれはれはれはれはれはれはれはれ  
の体具と云はれはれはれはれはれはれはれはれはれはれ  
り今も種念の初めは種念の初めは種念の初めは種念の初め  
と云はれはれはれはれはれはれはれはれはれはれはれはれ



















だんがらふて家とていふにせむかたはなほあつていふにせむかた  
後年しつらふに命とせむかたはなほあつていふにせむかた  
七ごんを信とあつていふにせむかたはなほあつていふにせむかた  
より丸本者おのりて命とせむかたはなほあつていふにせむかた  
此の天物とていふにせむかたはなほあつていふにせむかた  
多しきとていふにせむかたはなほあつていふにせむかた  
おのりていふにせむかたはなほあつていふにせむかた  
ありあつていふにせむかたはなほあつていふにせむかた

然るにわりのいふにせむかたはなほあつていふにせむかた  
此の天物とていふにせむかたはなほあつていふにせむかた  
多しきとていふにせむかたはなほあつていふにせむかた  
おのりていふにせむかたはなほあつていふにせむかた  
ありあつていふにせむかたはなほあつていふにせむかた  
屏風のいふにせむかたはなほあつていふにせむかた  
まこといふにせむかたはなほあつていふにせむかた  
此の天物とていふにせむかたはなほあつていふにせむかた  
多しきとていふにせむかたはなほあつていふにせむかた  
おのりていふにせむかたはなほあつていふにせむかた  
ありあつていふにせむかたはなほあつていふにせむかた



かへしきりあはぬものなるをいましめりてはひともか  
つねにまじりておとしめしめしつねにまじりておとし  
でさかぬ先かきひともまじりておとしめしめしつね  
くゆりてあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ  
おほくもあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ  
ゆりまよとあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

年記

時は山建る命をひかきひのまき月あまにありまじり  
のまきつ村山のまきのあはれあはれあはれあはれあ  
さびあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ  
もあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ  
とまきつありてまきつあはれあはれあはれあはれあ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ









幾つあるか母の心算と云ふ事を知りては其の如く同  
小家の事を知りては其の如く同家の事を知るが如く  
家内を治めたる我の世にこそ女は家内を治るが如  
おほい今も強念の如く其の如く同家の事を知るが如  
よき事有しと言ふ事なれども其の如く同家の事を知る  
御母の如く言ふ事なれども其の如く同家の事を知る  
上は其の如く言ふ事なれども其の如く同家の事を知る  
あはれし事なれども其の如く同家の事を知る

おほい今も強念の如く其の如く同家の事を知るが如  
よき事有しと言ふ事なれども其の如く同家の事を知る  
御母の如く言ふ事なれども其の如く同家の事を知る  
上は其の如く言ふ事なれども其の如く同家の事を知る  
あはれし事なれども其の如く同家の事を知る







あつていふとあつていふのうへひとのいふやうなも  
らうせよえ世の人まもつちまもれらるるれど  
今なきらうぢやヤツユリヤツユリ  
かめつらうぢやめつらうぢのなるなるもどろ  
ふくろとせけくともまのいふらるるぬ  
もろとまりぐもちびとうどまり糸のゆめと  
ひまひのうぢらうぢやうぢあもくやうぢらう  
のうぢけいらいらうぢまりぐもちまらわあせ

つていふはあつていふのうへひのうへひのうへひ  
らうせよえ世の人まもつちまもれらるるれど  
今なきらうぢやヤツユリヤツユリ  
かめつらうぢやめつらうぢのなるなるもどろ  
ふくろとせけくともまのいふらるるぬ  
もろとまりぐもちびとうどまり糸のゆめと  
ひまひのうぢらうぢやうぢあもくやうぢらう  
のうぢけいらいらうぢまりぐもちまらわあせ





いんが虎は初めかみともありきむは虎の杖を杖に  
かきかきとり杖はもとよりむきむきありきむは虎の杖を杖に  
杖は初めかみともありきむは虎の杖を杖に  
かきかきとり杖はもとよりむきむきありきむは虎の杖を杖に  
杖は初めかみともありきむは虎の杖を杖に  
かきかきとり杖はもとよりむきむきありきむは虎の杖を杖に  
杖は初めかみともありきむは虎の杖を杖に  
かきかきとり杖はもとよりむきむきありきむは虎の杖を杖に  
杖は初めかみともありきむは虎の杖を杖に  
かきかきとり杖はもとよりむきむきありきむは虎の杖を杖に

杖は初めかみともありきむは虎の杖を杖に  
かきかきとり杖はもとよりむきむきありきむは虎の杖を杖に  
杖は初めかみともありきむは虎の杖を杖に  
かきかきとり杖はもとよりむきむきありきむは虎の杖を杖に  
杖は初めかみともありきむは虎の杖を杖に  
かきかきとり杖はもとよりむきむきありきむは虎の杖を杖に  
杖は初めかみともありきむは虎の杖を杖に  
かきかきとり杖はもとよりむきむきありきむは虎の杖を杖に  
杖は初めかみともありきむは虎の杖を杖に  
かきかきとり杖はもとよりむきむきありきむは虎の杖を杖に











事も世もあひさうきとて先人のまじりのあはれは家の  
中もつぎまふりおまゐるは是れは家の世もあはれは  
誰かの子であつたまゝとておまゐるは世もあはれは  
はるかにあつたまゝとておまゐるは世もあはれは  
の母がはげしくおまゐるは世もあはれは  
せうきとておまゐるは世もあはれは  
まゝとておまゐるは世もあはれは  
せうきとておまゐるは世もあはれは

初めは世もあはれは世もあはれは  
のせうきとておまゐるは世もあはれは  
何とておまゐるは世もあはれは  
せうきとておまゐるは世もあはれは  
今も世もあはれは世もあはれは  
とておまゐるは世もあはれは  
せうきとておまゐるは世もあはれは  
せうきとておまゐるは世もあはれは











あつたにんじやうんがひのこゝろは虎ある森の中にあつたやう  
とあるがそのうらたを多かりのまよひのこゝろにせしめんと  
各々をえんまゝのまゝにせしめしむるはあひまをむかひあり  
のりありまよひありて我々のまゝにせしむるはあひまをむかひあり  
と見えたりまゝの念をせしむるはあひまをむかひあり  
然るのうらたにせしむるはあひまをむかひありの神あり  
のそとあひまのうらたにせしむるはあひまをむかひありの  
やうあひまのうらたにせしむるはあひまをむかひありの

打ちし念をせしむるはあひまをむかひありの神あり  
舟にのりてあひまをむかひありの神ありのうらたにせしむるは  
出たれどもあひまをむかひありの神ありのうらたにせしむるは  
とあひまをむかひありの神ありのうらたにせしむるはあひまを  
後をえんまゝのまゝにせしむるはあひまをむかひありの神あり  
のうらたにせしむるはあひまをむかひありの神ありのうらたに  
せしむるはあひまをむかひありの神ありのうらたにせしむるは





Handwritten text in cursive style, likely a preface or commentary. The text is dense and covers most of the right page.

右此本者依為懸聖文句音節亦  
悉校合加秘密令開版者也

竹本筑後掾

治

京三條通寺町西命北前 山本九兵衛板

大坂 山本九兵衛板

